

■ 特別講演 「臨床検査からのメッセージ」

川崎医科大学 検査診断学 教授
川崎医療福祉大学 医療技術学部 臨床検査学科 学科長 通山 薫 先生

■ 基調講演 「新型コロナウイルス感染症への地方衛生研究所の検査対応と課題」

愛媛県立衛生環境研究所 四宮 博人 先生

■ 教育講演 「病院管理者がみる臨床検査技師の未来～大学病院運営にいどんだ技師より～」

徳島大学病院 病院長補佐 / 徳島県臨床検査技師会会長 中尾 隆之 先生

■ 教育講演 「データサイエンスが支える臨床検査の未来」

川崎医療福祉大学 医療技術学部 臨床検査学科 教授 片岡 浩巳 先生

セッション	生理部門			血液部門
	シンポジウム1	シンポジウム2	シンポジウム3	シンポジウム1
タイトル	原点にいどむ!	今の自分にいどむ!	疾患にいどむ!	MDSにいどむ
サブタイトル	基礎から検査を考える	明日から変わる! ステップアップエコー	疾患と検査を結び付けて考えよう	MDS診断へのアプローチ
企画のねらい	各検査についての手技や手順、きれいな記録をするための方法、機器の精度管理といった基礎的な内容を再確認することは各検査の精度を上げるために重要です。また緊急報告(急変事例)や運動負荷禁忌など検査時に留意しなければいけない点についても情報共有していきたいと思います。初心者のみならず、ベテラン技師も初心に帰り、検査の基本を再確認していきます。	超音波検査は患者に由来する原因により描出不良となることもあるため、検査者のテクニックが重要となります。そこで各領域におけるエキスパートソノグラファーの講師陣に、プローブ操作から患者体位の工夫、機器の設定などにより、ここまで見えるようになるというピフォーアフター、またこういう所見があるときはここも観察(計測)すると診断に役立つポイントなど、明日からの検査に活かせる内容を解説していただきます。	人員に余裕もなく、ただ日常業務を漫然とこなしていませんか?日頃よく遭遇する疾患についての特徴的な所見のみならず、ガイドラインや病態との関連性を意識しながら検査を行えるようになるために、最近の設定などにより、ここまで見えるようになるというピフォーアフター、またこういう所見があるときはここも観察(計測)すると診断に役立つポイントなど、明日からの検査に活かせる内容を解説していただきます。	骨髓異形成症候群(MDS)は血球の形態異常と無効造血を特徴とする造血幹細胞腫瘍です。WHO分類4版改訂では形態学的な異形成の病態と血球減少の評価が見直され、近年急速に集積されている遺伝子変異の情報MDSの診断や分類に与える影響についても述べられています。今回は末梢血液検査、骨髓検査のそれぞれの視点からのアプローチ、また、MDSと鑑別すべき疾患について解説・議論したいと考えています。

セッション	染色体・遺伝子部門	病理細胞部門	微生物部門	
	シンポジウム1	シンポジウム1	シンポジウム1	シンポジウム2
タイトル	遺伝子検査のトピックス	新時代の病理検査	新型コロナウイルスの経験を活かして新たな感染症対策にいどむ	薬剤耐性菌にいどむ!!
サブタイトル		未来を切り開くために	技術革新と検査体制の構築	薬剤耐性(AMR)対策アクションプランの効果と展望
企画のねらい	近年、検査技術の発展により遺伝子疾患の原因を遺伝子そのものから分析することが可能となってきました。研究が飛躍的に発展し、病気の解釈と血球減少の評価が見直され、近年急速に集積されている遺伝子変異の情報MDSの診断や分類に与える影響についても述べられています。今回は末梢血液検査、骨髓検査のそれぞれの視点からのアプローチ、また、MDSと鑑別すべき疾患について解説・議論したいと考えています。	従来、形態学的検査、とりわけ病理検査は医療の根幹をなすものでした。その位置づけは現在においても変わるものではありませんが、遺伝子検査の知見やAIをはじめとする新技術、医療をめぐる社会的背景との関係性の中で変革を求められる現状も出てきています。本シンポジウムでは、これからの病理検査のあり方を広い視点から考察し、病理検査領域にとってのより良い未来像を探りながら議論を深めたいと思います。	新型コロナウイルスの遺伝子検査は、PCR法やLAMP法などが行われていますが検査機器は多種多様です。また、抗原検査や抗体検査があり各施設で様々な検査がされています。各検査の特性を考慮し、どのように使い分けがされているか。さらに、各種検査の検体取り扱いや迅速抗原検査時の感染対策、精度管理や人員編成などにおいてどのような工夫をしているか。各施設の状況を知ることによって自施設への運用に活かすことができると考えています。	2020年で薬剤耐性(AMR)対策アクションプランが一区切りとなりました。医療分野の成果指標として、主な微生物の薬剤耐性率があります。各医療機関で様々な対策が行われてきましたが、2020年の目標値を全て達成することは非常に困難でした。しかし、各施設おける取り組みの効果と課題を検証することで、今後の薬剤耐性(AMR)対策への展望が開けると考えています。

セッション	検査総合管理部門	一般部門	生物化学部門	
	シンポジウム1	シンポジウム1	シンポジウム1	シンポジウム2
タイトル	変わりゆく医療環境にいどむ!!未来への布石	一般検査の謎にいどむ!!	RCPC	検査過程における異常の検出とその対応
サブタイトル	必要とされる臨床検査技師になるために、今できることは…?	謎解きはレベルアップに通ずる!	症例にいどむ!!	自動分析機の異常反応例・検査過程における異常要因
企画のねらい	現在、医師の働き方改革に伴い、AIをはじめ業務の効率化、タスクシフト/シェアが看護師をはじめメディカルスタッフで検討されている中、安全かつ適切な実施対応を確保する観点から各施設でいろいろなお話が実施されています。その中で、検査のプロである臨床検査技師の知名度・存在感・将来性をUPさせるにはどうすれば良いでしょうか。今回のシンポジウムでは、最新の業務範囲拡大を実施している施設の方々へ各施設でのどのように実施してきたか?チーム医療の環境整備やプロセスを提示いただき、今後の各施設での臨床検査技師の業務拡大の糸口になればと考えています。	多くの施設で実施されている一般検査、施設の大小に関係なく多くの疑問(謎)を抱えていると思います。不思議な細胞の出現などルーチン検査の中での謎のほか、検査の標準化、人材育成など、検査全体に関わる疑問まで、他施設の解決法を参考に更なるレベルアップを目指します。アンケート結果からいくつかの謎をピックアップしました。今回は、これらの内容を中心にシンポジストの方々にご講演いただきます。みんなで一緒に謎解きをしませんか。	機器・システムの進歩により短時間で多くの検査情報を臨床へ報告が可能になりました。しかし、病態と検査データとの結びつけはできていますか?我々臨床検査技師が、様々な病態を推測し結果を観察することで、患者や医療スタッフへのサービスに大きく貢献することができます。RCPCを通じデータの考え方を学び、それぞれの施設で活用していただくと幸いです。間違っていない構いません!考えることで先へ進めます。悩み考察し、質の高い討論ができればと考えています。	たった1項目の検査結果を報告する過程には様々な要因が影響します。現代の自動分析機は反応過程(反応タイムコース)を記録する機能を備えており、それを活用することで反応中の様々な異常現象を検出することが可能です。また、自動分析機に限らず生化学・免疫検査の検査過程に異常を起こす要因は多々存在します。このセッションでは異常反応例や異常を起こす要因にどのように気が付き、どのように対応したかを解説していただき議論したいと考えています。

セッション	輸血・細胞治療部門		教育部門
	シンポジウム1	シンポジウム2	シンポジウム
タイトル	輸血の安全に挑む!	不規則抗体同定に挑戦!!	臨床実習にいどむ
サブタイトル	輸血部門ができること、すべきこと	やってみよう消去法!(参加型セミナー)	未来の臨床検査技師を育てるために
企画のねらい	輸血の安全は、輸血検査はもとより、適正な輸血、投与方法、副作用の観察・対応など、様々な過程が正しく確実に実施されることで成り立ちますが、院内の複数の部署や様々な医療者が関わるため、一貫した業務体制を構築し、各部署と連携することが求められます。本シンポジウムでは、指針やガイドラインに沿った体制を整備するための取り組みや工夫などについてご講演いただき、「輸血部門ができること、すべきこと」の糸口として、明日からの業務に繋げていただきたいと思います。	不規則抗体の同定は、可能性の高い抗体、および、否定できない抗体を推定し、各検査結果から総合的に抗体の特異性を決定していきますが、日常検査においては、型通りの結果が得られないことから不規則抗体が絞り込めず、その後の輸血において血液製剤の選択に苦慮する場面も多いかと思えます。そこで、今回、消去法に焦点をあて、様々なパターンを準備し、参加者に消去法を行ってもらいながら、不規則抗体の同定までのポイントなどについて解説したいと思います。	各養成校における臨床実習の内容と臨床現場でもう少し学んでおけばよかったことなど、学生時代の様子を新卒技師にお話しいただきます。続いて、実習現場の担当者から学生に学んでもらいたいことや求めること・養成校の教員に求めることなど、学生指導における現場の苦労などをお話しいただき、養成校の教員からは臨床実習に向けて何を教えているか・臨床現場に何を求めているかなどそれぞれの立場で発表いただきます。学生・養成校教員・指導者それぞれの立場から臨床実習の在り方を考えていただき、よりよい臨床実習の構築ができればと考えています。

